性天の霹靂

第 1 章：ハプニング（リーシャ視点）

あたしの名前はリーシャ。17 歳の女子高生よ💕母は北欧の国の出身で、父は日本人。小さい頃から人とは違う金髪や蒼い瞳が嫌だったけど、今では気に入ってる。蒼い瞳も「神秘的だね」って言われるし、黒髪だと合わせにくいコーデや髪型も金髪だと合わせられる。浴衣や着物を着ると「新鮮だね」って言われることも多いの💕最近の悩みは、胸が大きくなってきて、セーラー服を圧迫しちゃって苦しいことも…💦あと、今の時期は、汗をかくと下着が透けちゃうでしょ？男の人の刺すような視線👀が気になっちゃって…どうして男の人ってそうなのか謎だよね。あたしは…別に誘惑しているつもりはないのよ！他の服装で登校できるなら、その方がいいし…

リーシャ：「凛〜。今日、ヒロたちとカラオケに行くの🎤一緒に行かない？」

凛:「…ゴメン…リーシャ、男の子がいっぱいいるんでしょ？あたし、そういうの苦手で😓」

リーシャ：「いっぱいって言っても 3〜4 人だよ？凛、可愛いし気立ても良いから絶対盛り上がるんだけどな🎉彼氏欲しいいって思わないの❓」

凛：「うん…あたしはまだいいかな…」

凛は、そう言って去って行った。

リーシャ：（凛はもっと自分に自信を持てばいいのにな…😣）

ヒロ：「リーシャ？今日のカラオケ🎤宜しくな！凛はどうった？」

リーシャ：「…行かないって…」

ヒロ：「そっか…あいつもいれば楽しいと思うんだけどな…それじゃ後ほど！」
リーシャ：「うん…」
　あたしは再び歩き出した。あたしがもう少し強引に誘ってみればいいのかな？でも無理して誘って楽しくなかったらもう二度と来ないだろうし…
　あたしは一瞬何かに衝突したと思ったが、上から落ちてくるモノには気づかなかった。
ヒロ：「！！！危ない！」
　あたしはその声を聞くと意識を失った…

第２章：アウェイクニング（？？視点）
リーシャ：「っ～～～！！…ここは？…」
　目を覚ましたリーシャ…でもどこか様子がおかしい…
リーシャ：「そっか、あいつを助けるために俺は…」
　瞳の色もいつもの蒼から茶色に変わっている…
リーシャ：「そうだ！あいつは！リーシャは無事なんだろうか！！」
　何故か自分の名前を声に出すリーシャ。身体を少し起こして周りの状況を確認する。
リーシャ：「？？？いない？？一体どこへ？？」
　変わらず不思議そうな表情のリーシャ。
リーシャ：「え…そこにいるのは…俺？？」
　リーシャは近くに倒れていたヒロに向かって、「俺」と言っている。
リーシャ：「まさか…これって、俺がリーシャになっているってことなのか？？」

リーシャは、自分の腕をまじまじと確認する。
リーシャ：「この細くて白い腕…俺のものじゃない…この声も女のもの…それにこの金髪！あいつしかいない！リーシャだ！今の俺はリーシャになっているんだ！！」
ヒロ in リーシャ：「…ということは…リーシャは俺になっているってことなのか？？」
ヒロ in リーシャは勢いよく立ち上がる。それに伴って豊満な胸が揺れる。でもそんなことを全く気にする様子もなく、女の子とは思えない大股でヒロの肉体に跨った。
ヒロ in リーシャ：「おい！リーシャ、お前なんだろ？目を覚ませよ！！」
しかし、ヒロの肉体は何度ヒロ in リーシャが呼び掛けても微動だにしなかった…絶望するヒロ in リーシャ…そして突然走り出した！廊下を走り、角を大きく曲がると…勢い良く何かに衝突した。
ヒロ in？？：「ごめん。悪いけど俺、急いでるから…」
？？：「え？ちょっと…何？？」
衝突された女の子は床に座り込んだまま訳がわからず混乱して、ヒロ in？？の後姿を見送る…
？？：「え？あの姿…どこかで見たような…」

第３章：ミステリー（ヒロ視点）
俺は保健室のドアを勢いよく開け、中に駆け込んだ。保険医の麻美先生が出迎えた。
ヒロ in？？：「大変なんだ！リーシャ…（いや、俺か）、ヒロの意識がなくて…」

麻美先生：「ヒロ？ええと…誰のこと❓❓」
ヒロ in？？：「山田ヒロタカ…君‥‥‥廊下で倒れてて何度呼び掛けても反応がないんだ！」
麻美先生：「それは大変ね。すぐに行かないと！どこかしら？案内してくれる？」
ヒロ in？？：「もちろん！こっちだ！付いて来てくれ！！」
　麻美先生は俺に続いて保健室を飛び出し、俺の肉体のある場所へ向かう。
麻美先生：「それにしても…頼りになるのね。普段は大人しい娘だと思っていたけど、いざとなれば、行動力があって😊」
ヒロ in？？：「それは…俺のカラダでもあるし…」
麻美先生:「俺の…カラダ？？…💡あ、そっか、あなたたち…付き合っている…ってことね。だからこんなに真剣に💕でも、あまりやりすぎっちゃったらダメよ！女の子は自分のカラダを大切にしないと💕」
ヒロ in？？：(そうか、麻美先生は事情がわからないから…でもここで「さっき起きた不思議な出来事」のことを話しても信じてもらえないし、このまま誤魔化すか…)「はい、気をつけます…」
　足早に現場に向かう俺たちの元に一人の女の子が駆け寄ってきた。
ヒロ in？？：「え？？？リーシャ？？」
　目の前にいるその肉体は間違いなくリーシャだ。その事実に俺は驚いた。
？？in リーシャ：「え…あたし❓」
　その言葉で俺は更に訳がわからなくなった。
ヒロ in？？：(目の前にいるのはリーシャ、口調から間違いなく女の子だ。リーシャの魂が元の自分のカラダに戻った？？でもそれなら何故俺を見て、「あたし」なんて言うんだ？)
麻美先生：「どうしたの？リーシャさん、…神宮司さん❓❓」

第４章：カスケード（ヒロ視点）
ヒロ in？？：(神宮司…だと？そうか…リーシャの肉体には凛の魂が入っていて、俺のこの肉体は凛なんだ！でもどうしてこうなった‥‥？？そうか？保健室に来る前に誰かに衝突したから、急いでいて誰かは確認しなかったけど、俺は凛と衝突して、そのときに俺と凛の魂が入れ替わってしまったんだ！)
凛 in リーシャ：「あの〜…あたし…」
ヒロ in 凛：「ゴメン、凛。今、急いでるんだ！事情は後で話すから俺の、いや…ヒロの席に座って待っていてくれ！」
凛 in リーシャ：「あ…うん…」
　そう言うと、俺は再び自分の肉体へ向かって走り出した。
麻美先生：「？何が…どうなっているの❓❓」
ヒロ in 凛：「事情は後で説明する！とにかく今は俺の…ヒロの元へ！」

ようやくヒロの肉体へたどりついた二人。

ヒロの肉体へリーシャが入って目を覚ましてくれることを期待していたが、先ほどと同じくヒロの肉体は１ミリも動かなかった。

麻美先生：「これはまずいわね！すぐに応急措置をしないと！」

そう言うと麻美先生は、自分の唇💋をヒロの唇💋に押し当てた。そして勢い良くヒロの肉体へと生命の息吹を吹き込んだ。

麻美先生：「ゴメンね、神宮司さんっ…あなたの彼氏にこんなことをして…でも今は…私が…やるしかないの！」

懸命に俺に人工呼吸を続ける麻美先生。その甲斐あってか俺の肉体が息を吹き返した。麻美先生は人工呼吸を続けた。麻美先生の息が俺の肉体に入り、俺の息を麻美先生が吸い込んでいる。麻美先生の顔は汗ばみ、今にも倒れてしまいそうだ。それでも麻美先生は必死に俺の肉体に人工呼吸を続けている。

ヒロ in 凛：「いや、そんなことよりは今は…俺になんかできることはあるか？」

答えを聞けずに麻美先生がヒロの肉体に覆い被さって倒れた…

第５章：コンフュージョン（ヒロ視点）

ヒロ in 凛：「麻美先生！」

俺は麻美先生の肉体を呼び肉体を起こすが、意識を完全に失っている…

ヒロ in 凛:「なんてことだ…リーシャに続いて麻美先生も…こうなったら俺が二人を助ける

ために人工呼吸をするしかないか…」

俺がそう決意したとき、俺の肉体が目を覚ました！そして…麻美先生の肉体もほどなく目を覚ました！！でも起き上がれないのかまだ二人の肉体は重なったままだ。

ヒロ in 凛：「麻美先生、大丈夫か？」

麻美 in？？：「ええ、ちょっと無理し過ぎたみたい…😓」

ヒロ in 凛：「麻美先生のお陰でリーシャ、いや…ヒロも意識を取り戻したようだ！リーシャも大丈夫か！」

？？in？？：「う～ん…あれ？ここは？あたし、何をしてて…そうだ！💡あたしはヒロに庇ってもらって、それから…意識を失って…ありがとー、ヒロ。ヒロは怪我がなかった❓」

ヒロ in 凛：(ん？何かおかしい…どうしてリーシャは俺のカラダになっているのに、ヒロが別にいるように話しているんだ？俺が凛のカラダにいるなんてわかるはずないし…それに麻美先生の声もすごく低くなっていて…人工呼吸の疲れと意識喪失のせいか？？」

そんなことを考えているうちに二人が起き上がった。そして二人はお互いを見て言葉を失っている。そしてようやく口を開くと、驚きの発言をした。

麻美 in？？：「えーー！！私～～❓❓😱」

？？in？？：「何？私って…どー言うこと？？😱」

ヒロ in 凛：「この状況！！リーシャと俺、そして俺と凛が入れ替わったのと同じで、この二人は入れ替わっている！と言うことは、俺のカラダにいるのは麻美先生で、麻美先生のカラダにいるのはリーシャってことになる…」

麻美 in ヒロ：「何を言っているの❓私にわかるように説明してちょうだい、神宮司さん。」

第 6 章：ミスマッチ

ヒロ in 凛:「二人とも冷静に聞いてくれ！今のそのカラダは他の人のカラダなんだ！そうだ…凛も俺の席で待っているから、続きは教室で話そう！」

ヒロ in 凛は二人の手を取り、強引に教室へ連れていった。凛 in リーシャはヒロの椅子に座って不安そうな表情で待っていた。

凛 in リーシャ：「私…のカラダ…だよね？私がさっき走り去って行ったから、おかしいな？って思って待っている間、鏡で確認したの…そしたら私がリーシャになっていて…」

麻美 in ヒロとリーシャ in ヒロが教室の中に入ってきた。

凛 in リーシャ：「宙敬君？それに麻美先生？」

麻美 in ヒロ：「実は私たち二人も入れ替わっていて、これは私のカラダじゃないのよ…」

リーシャ in 麻美：「どうしてこうなったかは、あたしたちもわからない。だから入れ替わっている 4 人で知っていることを話して共有しようと思ってここに集まったの。」

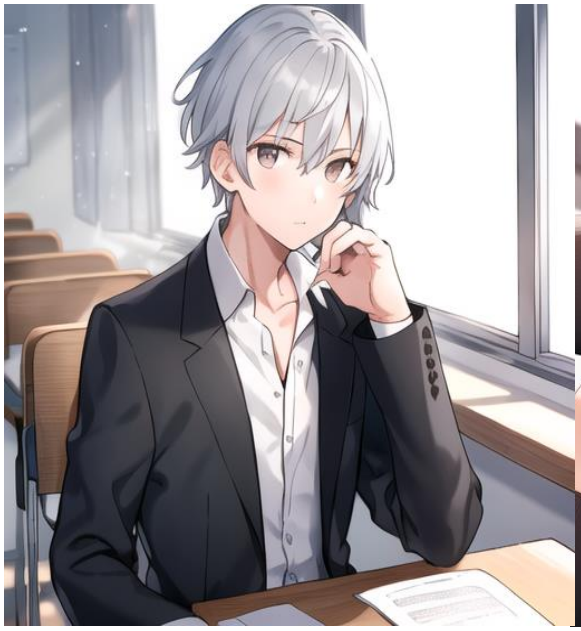
ヒロ in 凛：「まずは自分の魂の椅子に座ろう。」

ヒロ in 凛が凛 in リーシャの手を取り、「神宮司　凛」というシールが貼られた椅子に座らせた。自分の椅子なのに遠慮がちに座っている。そんな社交的なリーシャも凛の魂が入るとしおらしくなってしまう。

麻美の肉体に入っているリーシャは、「バレンタイン　リーシャ」というシールが貼られた椅子に座った。リーシャの魂が入ることでクールな麻美が天真爛漫に見える。

麻美 in ヒロは、空いている「水樹　結菜」というシールが貼られた椅子に座ってもらった。活発なヒロだが麻美の魂が入ることで落ち着いた男の子へと変貌してしまう。

そしてヒロ in 凛は、それまで凛 in リーシャが座っていた「山田　宙敬」と書かれた椅子に座った。控えめで可憐な凛もヒロの魂が入ることで勝気で豪快な女の子に変わってしまった。



第７章：デリカシー

凛 in リーシャ：「あの…あたしのカラダに入っているヒロ君…その座り方だと、見えちゃうから…足を閉じて座ってもらえると嬉しいんだけど…🥺」

ヒロ in 凛：「ああ…悪い…いつもの癖で m(__)m。でも足をくっつけると、汗が下着に移っちゃって気持ち…😊」

リーシャ in 麻美：「コラ！ヒロ、凛のカラダにそんなデリカシーのないこと言わせないの！！😠」

麻美 in ヒロ：「そうよ！ただでさえ、男の人に自分のカラダを奪われて恥ずかしい想いをしているんだから！！😠」

凛 in リーシャは俯きながら小さくコクっと頷いた。これもいつもの天真爛漫なリーシャからは見られない仕草だ。

ヒロ in 凛：「ゴメン…気を付けるよ…でも麻美先生のカラダが注意するのはいいとして、俺のカラダが俺に注意するのは違和感ある…それと麻美先生は俺のカラダになってやっぱり恥ずかしいのか？？」

麻美 in ヒロ：「私は…別に…男のカラダなんて見慣れてるし…」

ヒロ in 凛：「ってことは麻美先生は、処女じゃないんだな…まあ、結構美人だから彼氏がいるのもわかるけど。」

ヒロ in 凛のこの言葉には麻美もさすがに顔を赤らめた。すかさず、

リーシャ in 麻美：「だから！男が女の子にそんなこと言っちゃダメでしょ！！😠」

ヒロ in 凛：「いや、今、俺、女の子だし（笑）」

麻美 in ヒロ：「まあ、私はあまり気にしないけど、美人って言われたし😊…処女じゃないのは事実だし、でも男のカラダに戻って、他の女の子に話すときは、そういうことを言わな

い方が良いわね。」

それから４人はその日起こったことをすべて話して共有した。入れ替わりのきっかけは、衝突と口づけだと推測し、元に戻ろうと何回か同じことをしてみたが…元には戻れなかった…そして４人は自分の肉体の家に戻ることにした。

第８章Ａ：インターカルチャー1（凛＆麻美視点）

あたしはリーシャの自宅に戻っていた。リーシャの部屋は結構広くて、服の種類も多くおしゃれグッズも揃っている。女の子にとっては憧れる部屋だ。

凛 in リーシャ：「宙敬君の魂があたしのカラダに乗り移ったら、あんなに頼りがいのある表情になるのね…はしたない振る舞いは止めてほしいけど（笑）」

あたしはベッドにうつ伏せになった。金色の髪がぱさっと肩におりてくる。立ち上がろうとすると、胸が大きく弾む👺

凛 in リーシャ：「女の子同士だから見ても良いよね❓」

あたしは裸になってリーシャの肉体を確認した。

凛 in リーシャ：「…同じ女の子なのに…リーシャは美人だし、スタイルも良くて、みんなから人気がある…」

凛 in リーシャ：（宙敬君があたしのカラダを乱暴に扱わないか心配だけど…あたし…このままリーシャのカラダでもいいかも…😊）

あたしはヒロの自宅に戻った。

麻美 in ヒロ：「山田君、見た目は可愛い子なのにな…そうだ💡山田君には妹がいたわね。」…

咲夜：「あ〜〜疲れた……？…お兄ちゃん？😮」

部屋のドアを開けて誰かが中に入ってきた。妹の…（ノートの名前を見て）…咲夜ちゃんね。

麻美 in ヒロ：「咲夜ちゃん、これは……」

咲夜：「お兄ちゃん…それ…あたしのセーラー服だよね。」

麻美 in ヒロ：（まずいわ…ここで手早く着替えたのは良かったけど、こんなに早くに戻ってくるなんて…）

咲夜：「似合ってるじゃない！可愛いよ💕…お母さんには言わないであげるから…代わりに…」

咲夜ちゃんの要求は、咲夜ちゃんのお話を聞いてあげること。ただし、このままのセーラー服を着たままの姿で。

咲夜：「ありがと、お兄ちゃん。お姉ちゃんと過ごしてるみたいだった😊ずっとこんな感じだといいのにな…」

麻美 in ヒロ：「咲夜ちゃん……」

第８章Ｂ：インターカルチャー2（リーシャ＆ヒロ視点）

あたしも麻美先生の部屋に帰ってきた。一人暮らしだけど、部屋は片付いていて、洗練されつつも可愛らしく大きなぬいぐるみなどが置いてある。鏡で自分の姿を確認すると、いつものクールな表情ではなく、あどけなさが残る少女みたいだった。

リーシャ in 麻美：「麻美先生もこういう表情をすれば女子高生って言っても通じるんじゃないかしら…でも麻美先生のカラダ、経験済って言ってたよね。…なんかカラダが熱くて😵‍💫…求めてるんですけど…」

…麻美先生も恵まれた胸を持ってる。あたしは肩と腰の疲れを感じ、椅子におしりを下ろした。胸が上下に揺れ、クッションの真ん中の穴にあたしのおしりが吸い込まれる💕

リーシャ in 麻美：「何これ、気持ちいい💕麻美先生のおしり、感じやすいんだわ😊でも…大きな胸ってのも大変なのよね…大きな胸が欲しいって言っている女の人も、男の子も一度この辛さを経験してみるといいんだわ。」

俺も凛の部屋に着いた。女の部屋なんて入ったことなかったけど、男とは全然違って何でこんなものがあるんだろう、ってものが多くある。俺は改めて鏡を見ると、凛が怪訝そうな顔をしている。

ヒロ in 凛：「俺の入っている凛はこういう表情なんだ…」

俺は思いっきり笑顔になると、思わず言葉を失った。

ヒロ in 凛：（凛が笑うと、こんなに可愛いのか…）

艶のある黒髪。吸い込まれそうな純粋な瞳。守ってあげたくなく華奢な肉体。俺はしばらく自分の、凛の姿に見惚れていた。

ヒロ in 凛：「ちょっと意識してみるかな…」

俺は再び部屋を見渡すと、何だか感覚が変わったような気がした。ここが懐かしい、落ち着く…俺は凛のピンクの可愛らしい椅子に座ると、そのまま意識を失った。そして翌朝、目を覚ますと、いい夢を見たような目覚めだった。